

## 蒲生干潟の植物④7

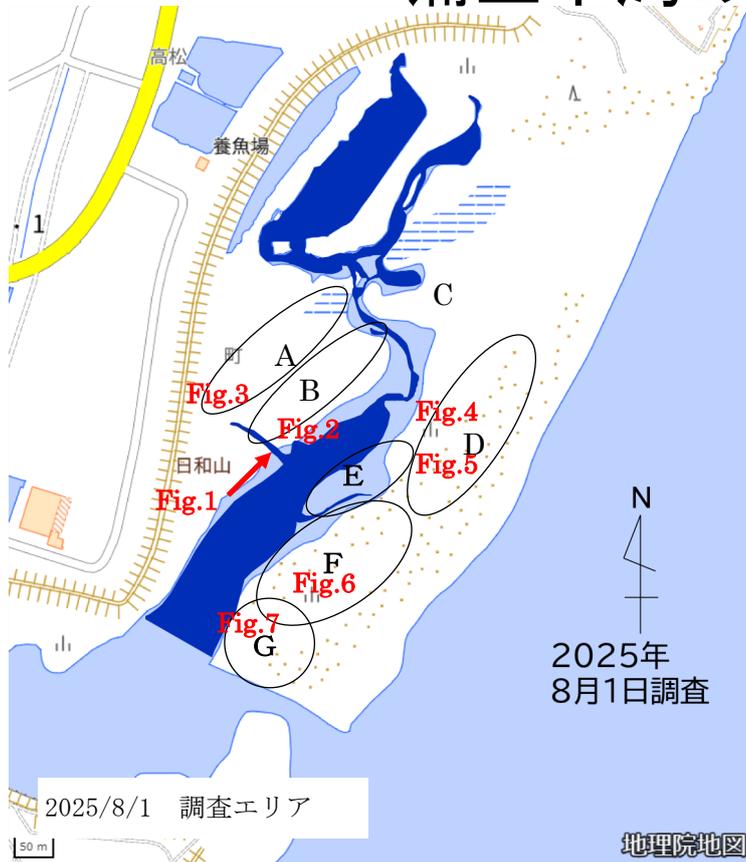
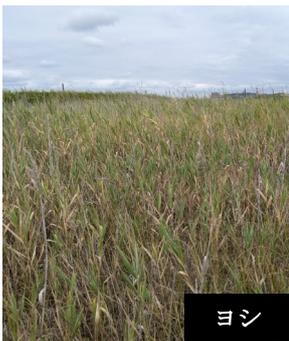


Fig.1 エリアBを南西側から撮影



ハママツナ



ヨシ



ハマニガナ



左：ケカモノハシ  
右：ハマニンニク



クロマツ



イタチハギ

Fig.3 エリアAで撮影

Fig.4 エリアDで撮影

Fig.5 エリアDで撮影

Fig.6 エリアFで撮影

Fig.7 エリアGで撮影

調査日時：2025年8月1日（金）10:30～11:40，天気：晴れ

7月30日（水）のカムチャツカ半島沖地震による津波が届いた直後の調査であった。定点観測ではエリアB一帯が緑色へと変わっており全体にハママツナの群落が広がっていることが確認できた。エリアAのヨシは草丈が背丈を超えるほど大きく伸び、多くが穂をつけていた（Fig.3），エリアDでは花をつけたハマニガナが点在していた（Fig.4）。エリアDの複数箇所でも密集して生えているケカモノハシやハマニンニクも穂をつけていた（Fig.5）。エリアFのクロマツは1m70cmほどの大きさまで成長している（Fig.6）。蒲生干潟のマツに関して最初に言及があったNo. 265(2021. 6. 16)では「40cmほどの背丈であった」と報告されている。エリアGの潟湖のすぐ側ではイタチハギが目立って大きくなっていた（Fig.7）。イタチハギは北アメリカ原産のマメ科の落葉低木であり、重点対策外来種となっている。対岸の堤防側には成木が多く生えているが干潟内でも大きく成長してきている様子が見られる。No. 312(2022. 6. 9)やNo. 360(2023. 7. 20)では30cmほどの幼木の報告がされているが、その年の冬には枯れてしまっていたようである。今後も継続した観察が必要である。エリアF周辺で津波の影響と考えられる漂着物が多く見られたが干潟の植物には目立った影響は認められなかった。

（伊藤勝彦）